

40615

教科書文庫

4
110
41-1932
20000 65678

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

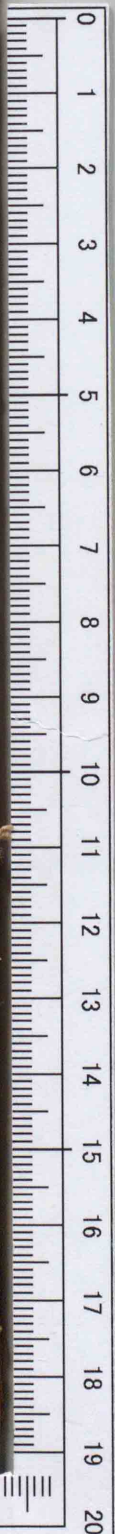
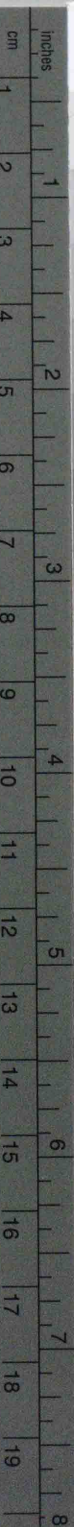


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
110
41-1932

新制中學修身 卷三



資料室



新制中學修身

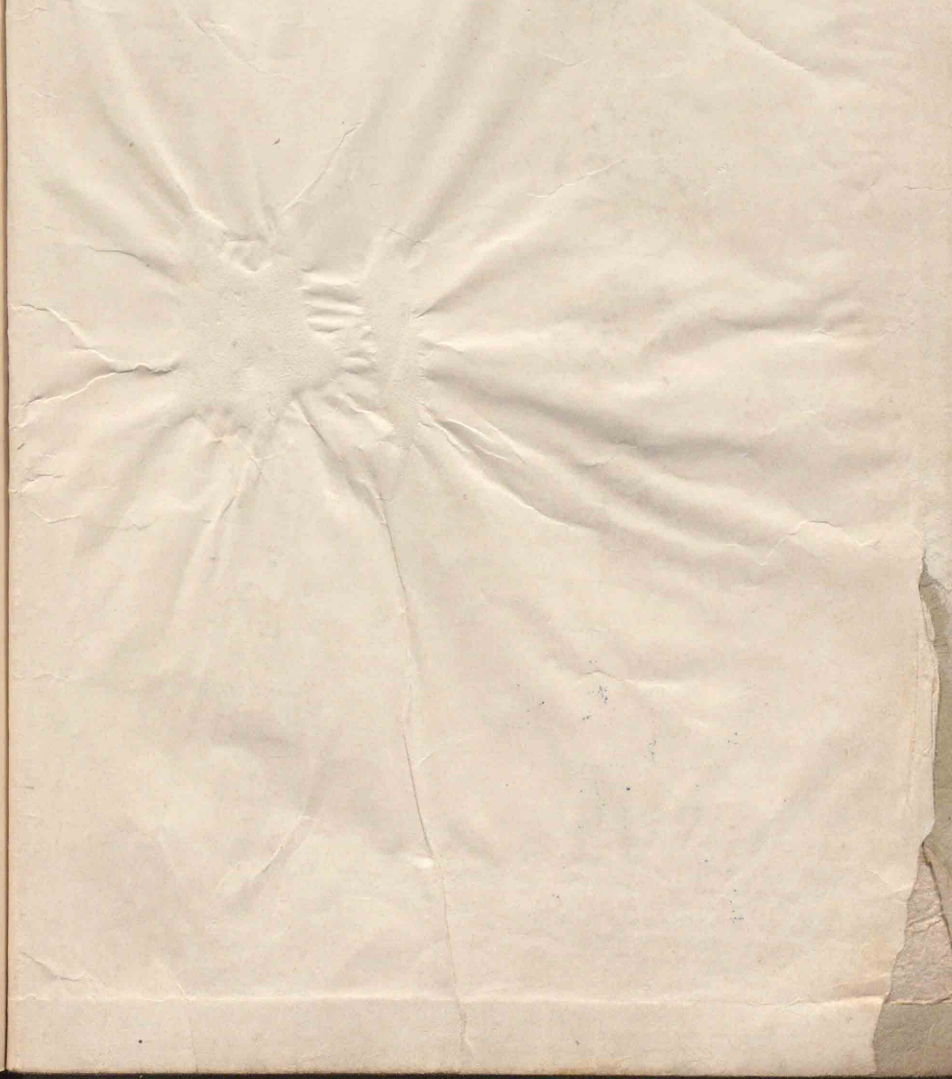
昭和七年二月九日  
中學校修身科用

文部省檢定濟

文學博士西晉一郎著



3959 42  
110  
117



天祖の神勅

豐葦原千五百秋之瑞穗國是  
吾子孫可王之地也宜爾皇孫  
就而治焉行矣寶祚之隆當與  
天壤無窮者矣

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹  
ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心  
ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精  
華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝  
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ  
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ  
徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ  
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天  
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕力忠良  
ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス

ルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ  
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外  
ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其徳  
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽



詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠

ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

內閣總理大臣副署

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ  
涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス  
是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵  
源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シ  
タマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ  
申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シ  
テ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ  
爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致  
セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ  
俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輒近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習  
漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革  
メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ  
災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ  
精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ  
振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實  
效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德  
ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ  
斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ  
歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ  
保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛

共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治  
メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ  
竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖  
ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ頼リテ彌國本ヲ固クシ以テ  
大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽  
攝政名

大正十二年十一月十日

國務各大臣副署

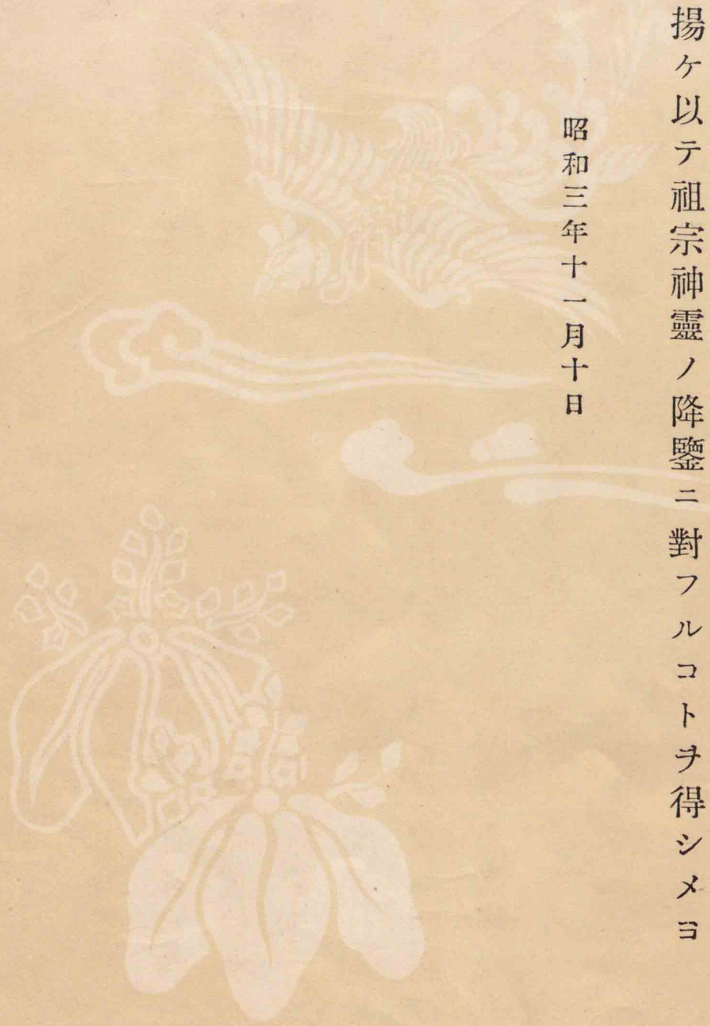
勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗惟神ノ大道ニ遵ヒ天業ヲ經綸  
シ萬世不易ノ丕基ヲ肇メ一系無窮ノ永祚ヲ傳ヘ以テ  
朕カ躬ニ逮ヘリ朕祖宗ノ威靈ニ頼リ敬ミテ大統ヲ承  
ケ恭シク神器ヲ奉シ茲ニ卽位ノ禮ヲ行ヒ昭ニ爾有衆  
ニ誥ク  
皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ  
視ルコト子ノ如シ列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆  
民相率キテ敬忠ノ俗上ニ奉シ上下感孚シ君民體ヲ一  
ニス是レ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存ス  
ヘキ所ナリ

皇祖考古今ニ鑒ミテ維新ノ鴻圖ヲ闢キ中外ニ徵シテ  
立憲ノ遠猷ヲ敷キ文ヲ經トシ武ヲ緯トシ以テ曠世ノ  
大業ヲ建ツ皇考先朝ノ宏謨ヲ紹繼シ中興ノ丕績ヲ恢  
弘シ以テ皇風ヲ宇内ニ宣フ朕寡薄ヲ以テ忝ク遺緒ヲ  
嗣キ祖宗ノ擁護ト億兆ノ翼戴トニ頼リ以テ天職ヲ治  
メ墜スコト無ク愆ツコト無カラムコトヲ庶幾フ  
朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國  
運ノ隆昌ヲ進メムコトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニ  
シ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ福祉ヲ益サムコ  
トヲ冀フ爾有衆其レ心ヲ協ヘ力ヲ戮セ私ヲ忘レ公ニ  
奉シ以テ朕カ志ヲ弼成シ朕ヲシテ祖宗作述ノ遺烈ヲ

揚ケ以テ祖宗神靈ノ降鑒ニ對フルコトヲ得シメヨ

昭和三年十一月十日







新制中學修身卷三

目次

一	幸	福	一
二	勤	勞	六
三	職	業	二
四	計畫	と	遂行
			一六





少年はかゝる家に住む幸福を想像して矢も盾もたまらず、飄然として家を出た。險路を辿り、峻坂を攀ぢ、漸く彼の山巔に達して其の小屋の前に立つた。少年は驚いた。さきに美しき金殿と見えしは今にも壊れんばかりの陋屋である。失望落膽して疲れた身を此の空屋の中に横たへると、不圖目に映ずるは山の彼方に夕日に映えて五彩まばゆき玉樓さながらの己が家である。茲に於て少年は翻然として悟る所あり、翌日直ちに下山して我が家に歸り、人は自己の境遇に應じて業を營むのが眞の最大幸福であると信じ、それから専心わが業務にいそしみ以て充實せる一生を送つたをいふことである。

働くことに生活の意義を見出さないうで、享け楽しむことを目的とする者は、此の少年の羨望と同じく幸福は内に在ることを知らず、却つて之を外に求める者である。世人は多く黄金を得ることに汲々としてゐる。黄金は固より尊ぶべきである。然しそれは黄金が貴き意義ある生活の實現に必要な物資なるがためである。黄金は手段であつて決して目的ではない。貴かるべき身命を苦しめて物資の爲に奔走し、黄金を得ようとして黄金に使役せられる如きは、幸福を求めて却つて不幸を招く結果に至るのである。故に我等は黄金を有意義に使役し得る才徳を修養しなければならぬ。

幸福を外に求める者は、或は自己の権力を振ひ他を憎伏せしめることを快とし、或は名聲を掲げ、名譽を博すること  
を人生最大の幸福とする。然し権力は善を以て衆人を統御すること  
に用ひて始めて意義があり、名聲は其の實に伴つてこそ始めて眞の榮譽である。  
幸福を外に求める者の権力・名譽は必ず之を失墜する時があり、先の幸福とした所は、今は失望の苦と變じ、或は虚勢を張り虚名を得ようとして自ら苦しむに至るものである。

幸福は内にあり

彼の俳優を見るに、或は偉人に扮し、或は匹夫に扮する。けれども一度其の假面をとれば、舊に依つて一介の俳優たるに過ぎぬ。世相も多くは之に類する。富貴利達は人の

眞の幸福

好む所であるが、これに相當する人格・力量を缺けば、殆ど彼の假面と同然である。「眞の幸福は外部境遇より生ずるものに非ずして、内部の知識と徳義より生ずるものなり」とソクラテスも言つてゐる。

内界の幸福として先づ擧ぐべきは身體の健康である。而もこの幸福は飽食・暖衣の幸福ではなく、節制・勤勉・質素によつて得た快濶平靜な元氣の幸福である。次に智識を蓄へ、趣味豊かなるも人生の幸福である。けれども以上の如きは眞の精神的幸福に比すれば尙未だ手段たるに過ぎぬ。眞の幸福は日常の行狀が公明正大であつて、俯仰天地に恥ぢざる心から生ずるのである。古人の所謂「心廣く體胖な

不幸  
不快  
満足  
幸福  
②—感性  
(ジャンナイ)

る境地で、公明の精神によつて得る幸福である。而して此の幸福たるや、決して「富は屋を潤す」と言ふが如き幸福の比ではないのである。

二勤 勞

勞 働

勞働とは普通、生活に必要な物資を得んが爲に働くこと、特に身體を働かすことを言つてゐるが、昔から「力を勞する者あり、心を勞する者あり」といふ語もあれば、心身を働かして勞苦することを意味するのである。等しく勞働といつても、肉體を勞することの多いものと、業務の計畫を立て、組織を作り、多數の勞働者を指揮監督する等心を勞すること

生産  
コウカニケル

の多いものがある。前者を肉體的勞働といふ時は、後者は精神的勞働といふことが出来る。狹義に勞働といへば肉體的勞働を指すのである。要するに勞働は或目的を達せんが爲に勞して働くことであるから、活動そのものを樂しみとする遊戯とは大いに異なる。而して、常に或種の勞働に従事するとは即ち是を職業とすることである。

更に他の觀點よりすれば、理髮業の如く直接生産に關係のない勞働もあれば、農業・工業の如く直接生産を目的とする勞働もある。一切の經營を自身で行ふ獨立勞働もあれば、自ら經營に當ることなく、單に勞働に當つてこれに對する報酬を得ようとする雇傭勞働もある。故に普通勞働と

勞働の種類

いつても、事實に就いて見ればいろくゝの形態があるのである。

或職業を求めて勤勞するのは其の人にとつては生業である。社會の一員として何等かの生業を求め、自己の勤勞を以て自己の生命を維持し、更に社會に寄與すべきは人間當然の義務である。無爲徒食以て其の日を送り、奢侈逸樂に耽るが如きは社會を害する罪人といつてよろしい。祖先の遺産によつて生活する者も、社會に有益な何等かの業を擇んでその資財を運用し、自ら勤勞する所がなければならぬ。畏くも明治天皇は

家富みてあかぬことなき身なりとも

人のつとめにおこたるなゆめ

とお諭しになつてゐる。

燦然たる今日の文化は人類が過去幾千載に於ける絶えざる勤勞の所産である。水邊に魚介を探り、林間に果實を求めた原始時代から、撓まず倦まざる人類の身體的精神的勤勞の集積が、今日の文化を形成してゐるのである。人は自ら勤勞することに依つて始めてこの文化生活に參與し、其の向上進歩に貢獻することを得るのである。自ら勤勞しない者は、何等この文化に貢獻することなく、社會生活を益することの出来ない者であるから、實は社會に生活する資格のない者と言つてもよいのである。

之を事實に就いて見ても、勤勉にして労働を厭はない國民は繁榮し、労働を厭ひ安逸遊惰に流れる國民は必ず衰亡してゐる。我等は決して労働勤苦を厭ふことなく、各自その従ふ所に努力勤勉して國家の繁榮に資する所がなければならぬ。

上に述べた所によつて知られるやうに、職業に従事して労働に服するのは、單に己一身の利益の爲ばかりでなく、同時に社會生活に寄與し、國家の繁榮に貢獻する所以である。而して一身の利と社會公衆の利とは元來背馳するものではない。社會に貢獻することが大であり、多くの人を益することが出来れば、自分も亦多くの報酬を受けて自ら利益

を得るのである。稀には此の理の如くならぬ事があるとしても、人は理に従つて行動すべきものである。人を益するほどの事も行はずして、不當の利を收めることは固より吾々の恥づる所である。寧ろ大いに人の爲に盡して、受くる報酬の少いことに心安さを感じるのである。蓋し眞の報酬とは、社會國家に對して我が爲せる善行爲そのものをいふのである。

### 三 職 業

職業とは前に述べた如く、人が其の生計を維持し、生活の目的を達するが爲に従事する一定の業務をいふのである。



人は社會生活を爲し、社會は複雑多様の職業の集合統一によつて成立つてゐる。人は此等の職業の何れか一に従事して社會の仲間入をなし、社會に一地位を占めることによつて、始めて獨立の一人格たる資格が得られる。故に人は必ず何等かの職業に従事して社會に於ける其の分を盡すべきである。ルソーは「職業を學ぶことの尊きは、職業を學ぶそのことよりも寧ろ職業を輕蔑する偏見に打克つにあり」といつてゐる。富家に生れた者も決して労働を卑しむ、職業を輕視するが如き不量見があつてはならぬ。

## 職業の種類

職業は種々な觀點によつて分類することが出来る。一般的には目的上から觀て農業・工業・水産業・鑛業・商業・交通業・公務・自由業等に分つ。農耕・畜産・蠶業・林業は農業の類に入り、水産業には漁業・製鹽業を含み、鑛業には採鑛・冶金及び土石採取の二種があり、工業は種類が頗る多く、商業は物品販賣業・媒介周旋業・金融保險業・物品賃貸業等に分つことが出来る。

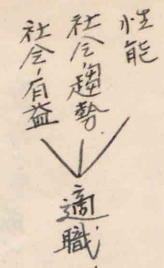
## 職業に貴賤なき理

職業に従事する場合は其の地位如何によつて上下の別を生ずることもあるが、人生内面の意義から言へば、貴賤の別はないのである。忠信の心と篤實の行とを以て従事すれば、世俗の賤しとする或種の筋肉的労働と雖も、至つて貴いのである。たゞ社會の安寧秩序を害する如き職業は、斷じて社會に存在せしむべきものではなく、實は職業といふ

べきものでもない。

職業は一身を立て、社會に貢獻する所以のものであるから、之が選擇には最も意を用ひなければならぬ。選擇を誤る時は、己一身の一生の不利となるばかりでなく、社會にとつても甚しき損失である。職業の選擇に當つては先づ第一に自己の天分のある所を察せなければならぬ。天分に應じた職業に従事すれば、愉快であつて成功もし易く、社會に貢獻する事も多い。第二に社會の趨勢を考へ、需用の多寡に着目せねばならぬ。社會的需用の多い職業の中で、自己の材能に適した者を選んで従事することは本則であるが、或は祖先傳來の家業であつて、之を繼承しなければなら

職業の選擇



ぬ場合もあり種々の事情で自己の理想とする業に就くことを得ない場合もある。社會的需用と言つても、一時的のものもあれば、永續的のものもある。實際に當つては複雑な事情の有るものであるから、自ら熟考すると共に、父兄先輩の意見を聽き、學業に従事してゐる今日に於て、將來従事すべき職業について大體の方針を定めることは頗る肝要なことである。

職業に對して心得べき最も大事なことは、第一其の職に安んずることである。其の職に一身を委ねて、我の世に立つ所こゝにありと深く覺悟すべきである。第二其の職に關しては、必要な知識と技術とを十分に修めることを怠つ

職業に對する心得

てはならぬ。其の職に堪能ならでは面目もないことである。

#### 四 計畫と遂行

嘗て米國に於てオハマ・ロツキー間の大沙漠地を開發する議が起り、其の計畫に當つた人人は鐵道の敷設を以て最良の策と考へ、案を具して議會に提出した。この事が世上に公表せられると、世人は其の計畫の餘りに遠大なるに驚き、當代達識の士さへ其の實現と成功とに疑問を挿み、反對の聲は囂々として所在に起つた。彼のウエブスターの如き人さへ、これ國費の濫費に非ずして何ぞやと非難するに

先見  
先見の明  
先見の識  
先見の慮  
先見の計  
先見の策  
先見の謀  
先見の慮  
先見の計  
先見の策  
先見の謀

Union Pacific Railway

至つた。然し、其の計畫が決して架空のものでなく、且最も時宜に適してゐることを信じた計畫當事者は斷乎として其の所信を貫き、工事に着手し進行に努めた。彼等の堅忍は酬いられた。幾多の曲折と辛酸とを経て、一條の鐵路は荒漠たる不毛の沙地に一線を描いて横斷した。期年ならずして豊饒なる菜圃は其處に開かれ、殷盛なる都市は其處に建設せられ、遂に米國の一大寶庫となるに至つた。

凡そ事を爲すには必ず一定の計畫がなくてはならぬ。計畫は必ず熟慮を経、多様の場合を比較商量した結果、立案せられたものでなくてはならぬ。計畫なくして事を爲すのは恰も楫なくして舟を行ると同じである。又計畫は須

らく遠大の所に着眼せねばならぬ。淺見に跼蹐し、小利に拘泥して、大局を逸してはならぬ。達人は必ず大所高所に着眼して計畫を立てる。

昔、伊藤仁齋は町家の出でありながら學問に志し、刻苦精勵家業を顧みざるに至つた。親戚や友人は擧つて「學問に力めて貧窶に苦しみ、陋巷に生活するも何の益あらん。君の才能を以てす。宜しく實業に就きて巨利を博すべし」と勸告したが、自己の資質は實業に適せず學問に向ふのが最も適當であると信じた彼は、斷乎として此の勸告を斥け、勤勉努力遂に一家の學を成し、朱王の學天下を風靡せる間に立ち、該博なる識見と、精緻なる思索を以て別に一旗幟を翻

立志

し、異彩ある堀川學派を建設するに至つた。

志は高處にあ  
れ

大丈夫世に處す、志は宜しく高處に立つべきである。志高遠なれば、眼前の小利害に惑ふことなく、逆境に堪へ、不遇を忍びて其の志す所に邁進することが出来る。志小ならんか、小成に安んじて其の才能を十分に發揮することが出来ぬのみならず、常に一身の利害のみに執着して、廣く國家社會を益する如きは到底望まれぬことである。

計畫と實行

一旦志を立て計畫を立てた以上は、決して中道にして廢してはならぬ。よく重きに堪へ、險難に撓まざる氣魄と鞏固なる意志を以て遂行すべきである。これと共に細心の注意が必要である。古來偉人・英雄と仰がれる者の多くは

大志と細心とを兼ね備へてゐた。かのナポレオンがエヂプト征伐の際、兵馬倥傯の間に於て本國との通信往復を整理し、遂に其の一通をも紛失しなかつた如きは、如何にこの英雄が一面に細心であつたかを語るものである。志が高遠なるに隨ひ、思慮は益、周密なるを要する。

立志の真切なる所

世人の多くは名利に志す。然し眞の立志は道德を修め、人格を修養するに在る。中江藤樹は「志すとは道に志すなり」と曰ひ、又「其の一度立つ時は徳に入る事難きに非ず。故に志立チタ而學半ナハといへり」と曰つてゐる。祿仕を辭して郷國に退き、缺乏に甘んじて只孝養を念とし、傍ら學を修め、酒を嚙カぎて半生を郷村に送り、人を教へて、世に近江聖人と仰が

Imitation

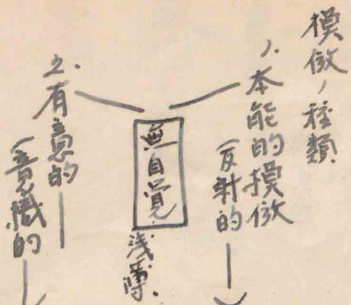
模倣

れ、萬代の師表と崇めらる。藤樹の立志こそ眞の立志と言ふべきである。

### 五 模倣と創造

行軍又は演習の際、隊中の一人が不圖恐怖に襲はれて防衛的態度をとると、他の者までも知らず識らず恐怖の情を覺えて同様の姿勢をとる事がある。かくの如きは群集の間に於ては屢見る所であつて、之を本能的模倣といふのである。學校等の團體生活に於て一人が服裝に異様な風を爲すと、直ぐに多くの模倣者が出て来る。これは一の對象が有意的に他に模倣せられる場合で、之を有意的模倣とい

五 模倣と創造

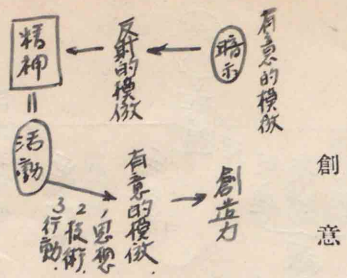


ふ。この二種の模倣は至つて淺薄なもので、多くは殆ど無自覺に行はれるのである。故に明確な自覺と思慮とを有する者は、この種の模倣には陥らない。世上諸種の流行は多くこの種の淺薄な模倣に基くもので、従つて流行を追ふ者の多くは自覺なく思慮なき輕薄の徒である。

模倣の理

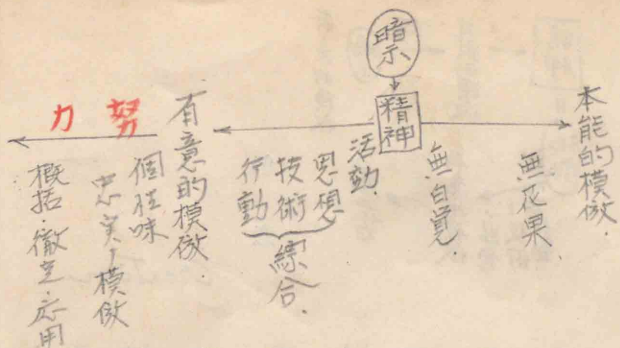
人には生來模倣性がある。吾々が自然に社會生活の諸形式に順應するのは此の模倣性に基くのである。而して自分よりも優れてゐると思はれる者の言動は之を模倣する傾向が特に強いものである。是に於て模倣は重要な意味を有するに至るのである。故に學校に於ける善良な校風は實に上級生の模範的氣風に待つ所が多い。上級生た

創意  
Creation



る者は、己を模せんとする多數の下級生あることを忘れず、模範を示す地位にあるものの責任の重きを考へて一言一行も忽にしてはならぬ。

模倣は決して原型と全然同一のものではない。多少の相違あることは免れない。これ模倣者各自の個人的特色が加はるからである。而してこの個人的特色の加はる所に創意が起るので、人類の進歩は實にこの個人的創意に由ることが頗る多い。すべて單なる模倣は當人の眞から出るものではないから善惡共に感染し易いが、創意に至つては其の人の内面から發するものであつて、眞實であり獨自のものである。



然し模倣は創造の漸をなすものである。世に絶対的の發明・發見はない。必ず先人の跡を繼いで新意を造り出すのである。學問に於ても技術に於ても先人後人相繼承しつゝ、各自其の創意を附加して不斷の進歩を將來するのである。而して其の中特に傑出せる創意を出した者を大發明家・大發見家と稱するのであつて、偉人と凡人との差は個人的創意の大小によるものといふべきである。けれども此の大なる創意は只自らにして起るものではない。先驅者の學說・業績を精しく研究して十分に會得し、然る後自分で工夫思索を凝らし、努力勉強の結果得られるもので、これその偉大なる所以である。彼の天才が靈感に打たれて産

創造 莫大・盲目

一 神・創造  
 二 盲目・発見  
 三 新・その創造  
 四 模倣物・性能の優秀  
 五 出・監り譽言

出した大作品にも、必ずその背後には偉大なる前人の影響刺戟と、その作家自身の平素の修養努力が潜んでゐる。故に「天才は努力なり」といふ語さへある。ローマは決して一日にして盛大をなしたものではない。自ら刻苦せずして徒に靈感の至るを待つが如きは、株を守つて兎を待つのに等しい。

眞の創造

創造を誤つて徒に新奇・奇抜を衒ふものとなし、又は自然怪奇の物を作つて人を驚かさ如きものとなすは、共に人類を毒するに過ぎぬ。抑文化は大なる精神的の流れである。偉人と雖も此の流れに汲みて始めて大なる創造を爲すを得るのである。我等が今學校に學び、學業を勵むもの

亦この流れに汲まんが爲である。語に「青は藍より出でて藍より青く、氷は水之を爲して水より寒し」とある。我等が出藍の譽を得るも得ざるも一に勉強努力の如何にあるのである。夫れ才は勉めて磨くによつて大いに其の能を發しはするが、元來天賦である。たゞ勉むることは其の人に  
ある。天才は其の人の自力として誇るべきものではないが、勉強は直ちに其の人自身から出づる最も稱揚すべきものである。

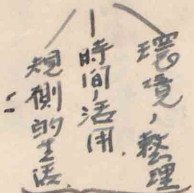
### 六 活動と能率

能率

人はその適性に應じた職業を選んで従事すると共に、出來得る限り無駄を省き、環境を活動に便なるやう整理し、時間を有益に使用し、勞力を經濟的に活用して、其の能率の増進を圖らねばならぬ。例へば書寫作業にしても、鉛筆の削り方、ノートの置き方、机上の學用品、参考書の位置等が作業を便ならしめ或は不便ならしめ、能率に關係すること甚だ大である。活動能率の増進の第一歩は實に自己身邊の整理にありといふべきである。加ふるに、人は自己身邊の整理に心を用ひることによつて緻密周到の良習慣を養ふこ

六 活動と能率

(神格) 活動 (思意) 能率 (恩意) 能率



○無駄な勞力を省く。  
○自然に適合する。  
○活動の質を高く、  
○活動の量を多くする。



スマイルズ自助論

六 活動と能率

三

活  
能率

問答活用

とが出来た。次には時間を重んじて空費せぬ心がけが最も大切である。「爲すべき事は即日之を爲せ」とは、ローマの政治家マーシアスの言で、ローマの諺となつたものである。或時一書をマーシアスに飛ばして敵黨が彼を殺さうと謀つてゐることを告げた者があつた。然るに彼は之を披き見ることを怠りし爲に遂に一命を奪はれた。悔恨せる彼は最後に臨んで此の言を發したと傳へられてゐる。其の日の事は其の日に爲し遂げ、決して明日を頼んではならぬ。學業の豫習復習、家業の雑務等皆然りである。嘗て佛國に大臣の位まで昇つた人がある。事務を處理すること頗る機敏であつて、些かの滯滞なく、而も社交運動の何れに於て

環境の整理

汚泥

動

少年と時間

及時當勉勵  
歲月不待人

晋陶淵明  
潜

も彼の活動は決して人後に落ちることにはなかつた。其の秘訣を問うた人に對して彼は「余は今日爲すべき事は必ず今日之を爲す。此の外何等の秘訣あるなし」と答へた。今日爲すべき事を明日に延ばすのは姑息にして因循である。姑息、因循は克己努力が足らず、意志薄弱なるによるのである。能率の増進を圖る者は、意志を鞏固にし、姑息の風を戒めなければならぬ。

「盛年不重来。一日難再晨。」と言へる如く、少年の時に於

ては特に時間を浪費しないやうに心掛けねばならぬ。シヨールペンハウエル曰く、幼少の時は萬事新奇に見ゆるを以て一々深く知覺に刻まる。故に日は長く思はる。年長ず

六 活動と能率

元

純粹理性批判  
判断力批判  
實踐理性批判

カント

六 活動と能率

三

実務的性能

注意

専心

正確

方法

時間厳守

敏捷

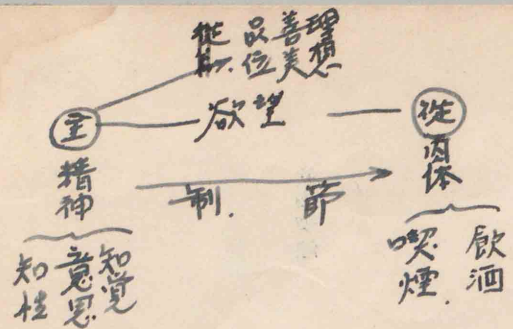
れば知覺鈍くなりて、新奇を感ずること少きが故に、日は短くなる。此の事を數學の公式を以て表すれば、恰も一年の價値は一年を年齢にて除したる商と比例すべし。即ち五歳の兒童の一年の價値は五十歳の老人に十倍するが如し。我等は少時に於て特に時を惜まざるべからず。而も世には金の盡くる時まで金の價値を思はざるが如く、時の盡くるまで時を惜まざる人多し。一旦老境に入りて時を利用せざりしを悔いて、有利に用ひんとするも、如何にせん時間空費の習慣は固定し、容易に去り難かるべし。損じたる健康は攝生によりて或は回復するを得ん。失ひたる富は勤儉によつて復獲られん。然れども失ひたる時は永劫に回

能率と意志

復するを得ざる彼方に逝きしなり」と。深く心に銘すべき言である。(人生は畢竟一時一日の集積である。一時一日を怠ればそれだけ一生を空費するのである。斯の生は再び得られぬ。時間は貴ばなければならぬ。) 時を重んじて活動すると共に、活動の種目を變更し、休養の時間を適宜に按排して規律的生活を營むは、最も能率を増進する所以であつて、現代に於ては特に必要のことである。大哲學者カントは生來羸弱の身であつたが、比類なき克己心を以て嚴密な規律的生活をなし、遂によく八十歳の長壽を保ち、哲學界に偉大なる業績を遺した。規律的生活を營むには必ず異常なる克己心の持續を必要とする。畢

六 活動と能率

三



節制の要

七節 制  
 三  
 竟能率を増進せしめる根柢は、鞏固なる意志と緊張せる精神とに在るのである。

七節 制

ともすれば放肆に流るゝ欲望に抵抗して心身を安靜ならしめる徳を節制といふ。蓋し諸種の欲望は人の生活の内容を爲すものであるが、之を節制せなければ却つて生活を害する性質を有つてゐる。例へば滋養物は元來身體を養ふものであるが、度を過ぐすと却つて病を醸すやうなものである。現代の物質的文明は大いに欲望満足の資を人類に供給するが、其の危険性も亦其の間に潜んでゐる。欲

欲を恣にする  
 ことの害

を縦にする時は高尚な事物に對する知覺を失ひ、意志と知性とを薄弱にし、遂に快樂に對する感受性さへも鈍くし、心身共に衰弱するに至る。「欲は縦にすべからず、志は満たすべからず、樂は極むべからず」と古人も戒めてゐる。肉體的欲望を縦にすると、精神が肉體を支配する力を失ひ、形骸の奴隸となり、外物に使役せられるやうになる。精神は主であつて肉體は従である。口腹の奴隸となるが如きは、主たる精神が従たる肉體に奉仕する主客顛倒の醜態であつて、苟も精神氣魄ある者の爲すべき事ではない。吾が欲望を節制する所以は、固より心身の安全を保つ爲でもあるけれども、其の主とする所は、精神が形體や外物の主

七節

制

欲望(文化)  
 人類、何と進歩の範圍であらう。

三

となつて正さしく人の人たる所以を發揮するにあるので、節制は即ちこの人間性を最も端的に表現するものである。青年の身體を害し、精神を痲痺すること最も甚しいものは飲酒と喫煙である。而してこの悪習は意志の薄弱と悪友の誘惑とから來る。米國の大統領であつたクリーブランドは青年時代に悪友に誘はれ、酒肆に赴かうとした時、不圖街上に掲げられた「罪の値は死なり」との金言を見て、儼然として悟り、これを止めて、悪友と絶ち、奮勵努力業にいそしみ以て一世の大人物となつた。彼が選ばれて大統領となつた時、先の悪友は酒による過失のため囹圄の裏に呻吟して舊友の榮達を羨望したといふことである。彼を大人物

## 飲酒喫煙

たらしめた原因の一をなす禁酒は強き彼の意志の賜である。佛典に「それ酒を呑む者に六種の失あり。一には財を失ふ。二には病を生ず。三には鬪ひ争ふ。四には悪名流布す。五には恚怒暴かに生ず。六には智慧日に損ず」と教へてある。喫煙の心身を害する事は飲酒のそれにも劣らぬ。喫煙の悪習は多くは好奇心に驅られ、他を模する所に因を發する。苟も學に志す青年は、其の精神力を鞏固にして外誘内邪に心身を溺惑する間隙を與へないやうに努めねばならぬ。

凡そ快樂を趁はんとするものは、一に其の理想が低劣であるからである。高尚な理想を抱き、善美の世界を憧憬す

## 節制と理想

るは青年學生の特色である。高き理想を掲げ、之に向つて進まんとする勇氣が萌せば、低劣な欲望は自ら撃退されてしまふ。或は學業に優位を占めんとして遊樂の暇なき者、或は運動競技に興味を抱いて、肉體的快樂に赴く事を忘るる者、何れも好箇の學生である。然れども第一義を言へば、善の理想を掲げ、精神の權威を發揮して人間の品位を維持向上せしむべきものであつて、これ人生の根本義である。

### 友人關係

青年と交友

友人關係は人の品性に影響する事が頗る大なるものがある。特に青年期は生涯の親友を得るに最も適し、且交友

の状態も漸次理性的となり、或は學藝上に於て、或は運動競技に於て、或は道德修養上に於て、種々の團體を作り會合を催して互に切磋琢磨する傾向を生じ、最も意義ある時期であるから、交友に就いては格別に注意しなければならぬ。

或處の香土が「薔薇が余に植ゑらるゝ前、余は何の異なる所なき普通の土壤なりき」と言つたといふ諺がある。又古語に「善人と居るは芝蘭の室に入るが如し。久しうして其の香を聞かず。則ち之と化すればなり。不善人と居るは鮑魚の肆に居るが如し。久しうして其の臭を聞かず。亦之と化すればなり。是を以て君子は其の與に交る所を謹む」とある。實に朋友の感化ほど善惡共に力の強いものは

友人の選擇

家庭の感化力ナクナリ、親友の感化力大ナル

交友之道

信

徵生が信

友團

秘密スポーツ

修養團體

ない。怠惰の者と交れば己も知らず識らず怠惰となり、趣味低劣な者と交れば己の品性もいつ知らず野卑となる。之に反して品性高く勤勉誠實な人を友とすれば己も之に化せられて、趣味高尚にして勤勉誠實なものとなる。故に諺に「其の友によりて其の人を知る」ともいつてある。交友を擇ぶは最も慎重にせなければならぬ。

凡そ交友の至極の目的は學問道德に於て互に切磋琢磨するに在る。常に信義に基きて交を繼續し、利害は固より快樂の爲にも交るべきものではない。英國の諺に「好天氣の友は風と共に變ず」とあるは、輕薄の交を戒めたのである。又杜甫は

交友の至極の處

翻手作雲覆手雨。

紛紛輕薄何須數。

君不見管鮑貧時交。此道今人棄如土。

と嗟嘆してゐる。切磋琢磨を目的としない交友は、利害の爲に忽ち疎遠となり、或は仇敵のやうにさへなる。親交を永く繼續する道は信義を本として禮意を失はず、寛容の心を以て相接するにある。若し友人が不幸患難に遭遇するを見たならば最も友情を盡くして或は慰め或は勵まして平素の交誼に報いるべきである。惡風に染み不良に傾ける者があれば、誠意を以て忠告する。心の變らぬこそ友として頼もしいのである。道德上大なる缺陷がない限りは妄りに交を絶つべきものではない。

友人と結んだ團體會合等に於ては高尚な理想を掲げてその目的を堅實にし、その團體を純潔ならしめるやう力めねばならぬ。自己の行動を公明にしてよく衆と諧和すべきは勿論、互に警戒誘導して惡を去り、善に進み、團體組成の目的を達すべきである。輕佻矯激の風を生じ、團體集合の力を持って不善を圖る如きは最も警むべきことである。諺に「狼と共に生活せよ。然らば吠ゆることを知るに至らん」といつてある。狼と共にゐても吠えず、附和雷同することなく自ら守る所の鞏固な意志が必要である。自己の屬する團體が惡風に傾く時、これに對すべき態度に凡そ三様ある。高蹈して自ら正を守り、而も衆に逆らはぬは其の一

である。同志が集つて別に清き一團を起こすは其の二である。起つて弊風を一掃し良風の振興を圖るは其の三である。而してこの三者の中、第三の態度は最も嘉すべきものである。蓋し自ら惡を爲さぬは固より、又人にも惡を爲さしめず、自ら正を行ふばかりでなく、人をも正に導くは最も高尚な善行であるからである。

### 九 信實と輕信

我等が世に立ち事を處するには言行を信實にせねばならぬ。信實を缺く言行は凡て偽である。信實は人を世に立たしめると共に、亦社會生活を成立せしめる根柢である。

信用を害し、社會生活を阻害し、友情を傷つけることは虚偽より甚だしきはない。事實でないことを事實とし、事實を事實でないとし、確實でないことを確實とし、或は事實を誇大にし或は過小にする、皆事實上の虚偽である。或は偽約し、又は輕率に約するは約束上の虚偽である。虚構の事を信じ損害を受けようとする者ある時、其の虚構なるを知りながら黙過するは沈黙の虚偽である。何れも人と人との間の信用を害し、生活を不安にし、社會結合を弛緩に導くことは同じである。互に實を以て語り合つてこそ信じ合ふことが出來、社會生活は安全に進行するのである。諺に「眞實は水なり」と。又孔子は「人にして信なくんば其の可な

るを知らず。大車輓ひなく、小車輓ひなくんば其れ何を以て之を行らんや」と曰はれてゐる。信は人道の中心である。あらゆる道徳は信實の基礎の上に立つて始めて眞の道徳たるを得るのである。

虚偽の原由を察するに、或は學業の不成績を疾病に歸するやうな怯懦の精神から來るものがある。或は他に迎合する爲に阿諛する卑屈の心から來るものがある。己の強情我慢から理を非に枉げる者、罪を他に轉嫁する邪惡の根性から偽る者、黨同性から他の非を庇護しようとする者等様々である。その動機は種々であるが、要するに、一時の私に惑ひ其の操守を失ふ者であつて、畢竟意志の薄弱から來



るのである。虚言者は實に憐れむべき薄志弱行の徒といはねばならぬ。

然し複雑な人事に於ては、必ずしも眞實を語るを適當としない場合がある。重病患者に疾病の眞相を語つてはならぬことがある。すべて問ふべからざるを問ふ者には答へるに及ばない。言語の眞實は人生を順正に導く爲であつて、生を賊し非を遂げる爲のものではない。好んで學友の非を訐おとくが如きは、故らこゝろに彼等の不正事を蔽ふのと同様、何れも正道ではない。

互に眞實を以て相語り、互に信じ合つて交ふことは大切であるけれども、不確かな人言や世評を輕々しく信ずる輕

輕信

信は戒めねばならぬ。反省と思慮とを缺く者は往々にして輕信に陥る。諺にも「片言聞いて理をつけるな」といつてある。輕信は自ら悔を招くばかりでなく、他にも禍を及ぼすことが少くない。ある維新の志士が世評に動かされて大久保利通を暗殺しようとした事がある。山岡鐵舟が制止したが聽かない。遂に利通の心事を探るべく相伴つて利通を訪うた。利通は一分の隙もなく、愛國濟民の熱誠を披瀝して言々肺腑を吐露した。某は始めて其の非を悟り、深くその輕信を悔いたといふことである。世上の風評に動かされて妄動する者は皆この類である。疑はしきは必ず事實につきて眞相を確かめるべきである。さなくて、徒

信實は人生を順正に導く爲である

に揣摩臆測して輕々に事を斷ずるは、思慮を缺き理性の盲めくらひたものである。

信は是れ義の本なり、事毎に信あれ。其れ善惡成敗は要する所信にあり。群臣共に信あらば何事か成らざらん。君臣信なくんば萬事悉く敗る。(聖徳太子)

一〇名 譽

名譽とは自己の人物事業に對する他人の賞讚又は非難をいふのであるが、社會に立つて活動する動機の一は名譽を得ようとするにある。故に古人は身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて父母を顯すを孝の終として學問徳業に勵

み、武人は惡名を被むることを身命を捨てるよりも苦しき事に思ひ、武勇を勵み廉恥を重んじて只管名を汚さないやうにと志した。

然し名は實の賓である。名を求めようとするものは必ずその實を力めなければならぬ。名に相當する實あつてこそ初めて貴き名である。孔子は「君子は終身其の名の稱せられざるを疾む」と曰はれた。これ即ち終身稱せられるに足るだけの徳行事業の實なきを疾まれたのである。其の實があつて期せずして同輩世人から賞讚せられるのは眞の名譽である。光榮として愈、行動を慎み善事を勵むべきである。又その實があつて社會の非難を招くことがあ

れば、それは眞の不名譽であるから、深く恥ぢて速かにその實を去るやうに力めねばならぬ。勿論實のない名譽は喜ぶに當らないと同様に、實のない悪名は恥づるにも及ばぬ。實のある所に自然にそれに相當する名が従ふのは當然であるけれども、必ずしも名實相伴はぬ場合も世には多いことである。蓋し人の思慮が屢、虚妄に陥り易いやうに、其の下す毀譽褒貶も亦多く正鵠を失することがある。生前には何等名を稱せられない者が、死後に至つて始めてその眞價を認められた人々も古來決して少くない。故に名聞聲價は末であつて本は自己の修養如何にあるのである。實を努めずに、たゞ名を求めること汲々とすれば、徒に他の

思はくを顧み、他の意を迎へることに心を勞して、その極虚榮に流れ、虚名を追ふ卑怯未練の徒とならざるを得ない。最も見苦しく恥づべきことである。

本を力めよ

自己の實力を信ずるものは、勿論他の賞讃を榮譽として喜ぶけれども、それによつて實力に増減のないこともよく知つてゐるから、譽められても驕慢には至らない。之に反して實を務めず、徒に名を求めるものは、偶、名を得ると喜びて自負倨傲となり、得なければ意氣忽ちに沮喪する。其の狀は眞に憐むべきである。本を力めずして末のみを追ふ者はすべて此の類である。

天爵と人爵

孟子は「天爵なるものあり。人爵なるものあり。仁義忠

信、善を樂んで倦まざるは此れ天爵なり。公卿大夫は此れ人爵なり。古の人は其の天爵を修めて人爵之に従ふ。今人は天爵を修めて以て人爵を要む。既に人爵を得て而して其の天爵を棄つるは惑の甚しきものなり。終にまた必ず亡はんのみといつてゐる。所謂天爵は人が道德を修めて得た人格品位である。人爵は人が與へる位階名望である。位階名望はその人の實徳實力に一致することもあるが、一致しないこともある。人の人たる所以は必ずしもその有無に關しない。道德人格は人の必ず修めなければならぬ所のものであつて、即ち人を人たらしめる所以のものである。人の眞の優越を決定するものは天爵であつて

名譽に對する心得

決して人爵ではない。位階名望は抑末であつて、人格道德が本であることを牢記せねばならぬ。

上に述べた通りであるから、名譽に關してはよく注意して、名譽心の奴隸となつて、徒に人の思はく世間の評判にうき身をやつすが如きことがあつてはならぬと同時に、又恥を忘れ體面を傷つけてはならぬのみならず、毀譽褒貶に會ふ毎によく反省して戒慎進修怠らず、天晴れ世の譽れとなり、面目を施し美名を後に傳へるほどの心がけがありたいものである。

名譽は徳に伴ふこと恰も其の影の如し。(シセロ)

一一恭 儉

恭 儉

一恭儉の意  
困リが壯敬(コトヲナニツツム)  
困リが節制 約セ  
在親爲恭、在己爲敬  
夫の心ニ恭敬ナクテ能ハズ親ニ恭敬ナリ  
アラガレナリ  
恥 畏レ懼レム

畏敬 精神主となる

謹 謹 放縱

親切 粗暴

徳義ヲ醜惡ナル動作ニ伴フ時  
ハ不恰ナルモノナリ

教育勅語に「恭儉己レヲ持シ」と諭し給うてゐる。恭とは  
うやくしくすることであつて、粗暴・放縱とならぬやうよ  
く己の態度・動作を慎むことをいひ、儉とはつまやかにす  
ることであつて、浮薄を去り驕侈を戒めて常に質實を旨と  
する意である。

凡そ人が粗暴・放縱となり、浮薄・驕侈となるのは、一に衝動  
に驅られ外物に動かされて、内に何等自制檢束する所がな  
いからであつて、意志の薄弱を示すものである。精神が一  
身の主となる時には自ら恭敬の心を生じて容貌・動作を慎

檢 身ヲ行フヲツツム  
對ラ甲フルニツツム

他

人々を修ム

己を修ム

恭儉

對己的  
對他的

心身的一致

み、禮義を正しくすると共に、よく外物の誘を斥けて、儉素自  
ら持するやうになる。「恭儉己レヲ持ス」とは即ち外誘内邪  
に克つて正しく一身を持すべきことをお諭しになつたの  
である。

心身は常に一致するものである。心に恭敬を失へば自  
然に身に威儀を失ひ、身に威儀を失へば、必ず心にもその慎  
みを失ふことになる。常に内に恭敬の念を失はず、精神を  
して一身に主たらしめると共に、外に容貌・動作を慎んで放  
縱に流れぬやう戒めねばならぬ。彼の粗暴を以て大度と  
誤り、態度風姿に無關心であることを得意とするが如きは、  
實は何等自重自主の念なき似而非者に外ならぬ。餘りに

禮節に拘泥して寛裕の風度を缺くのはよくないけれども、故らに粗暴野卑な風姿・動作をなすのは自ら品性を墜し、他人に對しても無禮である。恭敬の念を本として交る所に禮儀が生ずる。禮儀は自己の品位を保つと共に、社交を圓滿にし社會生活を文飾する所以のものである。

## 儉 德

奢侈・浪費は人の最も流れ易く陥り易きものである。故に「儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し」ともいつてある。原始時代の人類は貯蓄心に乏しく、將來の爲に財を残すといふやうな事は極めて稀である。これ將來といふ考へがないからである。唯彼等が明日のことを考へるやうになつて、始めて財を蓄ふべき必要を知り、今日の欲を

抑ふべき事を學んだのである。故に儉は遠き慮あるより始まるものであつて、口腹・耳目の欲に對する克己心がなければ行はれない。假令深き知識があり敏捷なる才能があつても、唯この克己的勇氣がなければ實行は期せられない。而して深き知識と敏捷なる才能とはすべての人に期待することは出来ないが、すべての人は欲に克ち得るものである。克つことの出来ないのは、しないので出来ないのではない。爲し得ることを怠つて、他日に悔を残してはならぬ。抑、青年學生は自ら勤めて財を作ることは出来ない。却つて父兄の財を費すのみの境遇である。されば格別に儉の一字を守つて、一は以て世の財物を尊重するの實を擧げ、一

は以て克己節制の功を積むべきである。これ一舉兩得の善事ではないか。

財物は天地の賜

夫れ財物は天地の賜である。人間努力の結果である。

一物も徒爾にして生ずるものではない。而して人は財物なくしては一日も生活することは出来ぬ。故に財物を浪費するのは天物を暴殄し、人の勞を無視する不徳義であつて、又自ら己の生存を危くする暗愚の振舞である。儉の意義のかく深きを知ると共に、これが實行に努めねばならぬ。上述の通り儉は財物身の上のことを約やかにすることから始まるのであるが、結局は心の上にて約やかになり、驕侈放慢の心を生ぜず、謹慎するにあるを忘れてはならぬ。

一三 勇 氣

勇 氣

廣く教へ最善を行ふこと  
狭く教へ最善を行ふこと  
上へ進歩

望怖 驗怒 貨地 威望  
希恐 経懐 多無 鈍絶  
1 2 3 4 5 6 7 8

希臘神話に傳へてゐる森林の神パンは有角、長耳、容貌頗る奇異である。嘗てゴール人が希臘に侵入した時、道にパンに會ひ、其の容貌の怪異なのに怖れて遽かに逃遁し去つたといふことである。恐怖は生物通有の情であつて、元危険を避け身命を保つ所以のものである。けれども突然この情に襲はれると、狼狽自失して變に應ずることが出来ず、却つて自己保存の意に反する行爲に出づることが往々にしてある。天孫降臨の際、先驅が天八衢にさしかゝると、長身高鼻、目の異様に輝いた一神が出て來た。皆怖れて進み

かねてゐた時に、天鈿女命は眞先に進み、泰然として之と問答し、天孫を導き奉る爲に態、出迎へた猿田彦であることを知つたといふことである。勇者は如何なる場合にも決して自失せず、沈着に前後を考へて處置を誤るものではない。他人には平氣なものであつても、自分には恐ろしいものがある。其の實恐るるに足らぬものを恐るるは氣質上の弱點に原因するのである。故に恐怖心を克服し勇氣を養ふには先づ此の自分の弱點から着手するがよい。然し人情は全然この危懼を脱し得るものではない。恐れながらも恐れに屈せず、一分の危懼を藏して進むのは眞の勇者である。事實恐るべきものに對しても敢て猪突する如きは

勇の修養

勇の種類と眞

眞の勇ではない、暴勇である。故に孔子は「暴虎馮河死して悔いなき者は我は與せず。必ずや事に臨みて懼れ謀を好みて成さん者なり」といつて子路を戒められた。慣れてゐるが爲に恐れなない勇がある。恐るゝに足らない理由を知つてゐるが爲に恐れなない勇がある。後者は自信に伴ふ勇氣である。綽々たる餘裕と敵を呑むの氣を以て競技場裡に臨む選手は其の實力に於て恃む所があるからである。自己の學力を恃む學生は勇みて試験場に入り、勝算胸中に確立せる大將は懼れずして敵に向ふ。此等は皆勇は勇であるが、眞の勇は道理を明らめ道義に立脚するによつて生ずる。故に昔曾子がその弟子の子襄に、子勇を



好むか。吾れ嘗て大勇を夫子に聞けり。自ら反して縮ちぢか  
らずんば褐寛博と雖も吾れ慄おそれざらんや。自ら反して縮  
くんば千萬人と雖も吾れ往かんといつてゐる。

公民的勇氣

今日の社會に於ては特に公民的勇氣を必要とする。社  
會的關係に於ける怯懦は迎合であり、退嬰であり、卑屈であ  
り、虚偽である。これに克つは良心の力を養ふにある。義  
を堅く執るにある。吉田松陰は「義は勇によりて行はれ、勇  
は義によりて長ず」と教へてゐる。富貴に阿諛せず、權力に  
迎合せず、固く正を執つて進んで主張すべきを主張する。  
これ今日最も必要とする公民的勇氣である。たゞかの偏  
見に拘泥して人を容れることを知らない固陋は義と相容

れないものである。正を執つて動かない爲には須らく學  
問勉強して識見を正大にし、眞の勇氣を養ふべきである。

一三古 道

國民道德

道德の一般的原理は國土、民族の性情に従つて特色ある  
相を帯びて現はれ、其の民族の歴史を形成する。人類の棲  
息する所、此の通則に洩れるものは一つとしてない。國民  
的道德精神の此の特色は民族の原始的所産である神話と  
して早くその萌芽を發する。神話は民族の稚き時代に於  
て、外周圍の自然に應じ、内天賦の性情に本づいて理想を描  
ける想像的産物といふべきである。

我が國最古の典籍である古事記は、美はしき筆致を以て建國の模様を述べて、國稚く浮脂うきあぶらの如くして、海月なす漂へる時、葦片あしかひの如く、萌え騰あふる物に因りて、多くの建國の神々生れ出で給へりといつてゐる。我等はこれによつて我が建國神話は著しく海洋的性質を帯び、生々發展を其の理想としてゐることを知るのである。實に天照大神を始め奉り建國の中心なる神々は生を司る神々であつて、従つて古代に於ては生成の作用は吉であつて善と考へられ、之を阻害するは凶であつて惡と考へられてゐた。而して建國の大精神は天照大神の神勅に萬世不易の姿を以て表現せられた。「豐葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也。宜爾

皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣。」が即ちそれである。列聖は此の神勅を體して國土を經營し國民を統治し給ひ、臣民も亦心を一にして聖旨を奉體し、大業を翼賛し奉つて美しき國民歴史を創造し、萬邦に比類なき國體を發展し來つたのである。此の神勅に發し國史に實「現せられて來た國民的精神を皇道とも神道ともいふのである。

今神勅の内容とする所を少しく詳らかに伺ひ奉らう。先づ第一に、我が國は萬世一系の天皇之を統治し給ふべき事を垂示し給うてゐる。これ三千年の歴史を通じて確乎たる國民的信念であつて、畏くも明治天皇の定め給へる大

日本帝國憲法に「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあるは、それを明文とし給うたのである。古來わが國民が天照大神を太陽と配して尊崇し、天皇を現人神として崇拜し奉るのは即ちこの民族的信念によるものである。「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とは明確なるこの事實に立脚せる立言であつて、我が國體の尊嚴なる所以は實にこの一條に存する。

徳治主義

次に徳を以て國を治め給ふ意も自ら神勅の中に察せられる。汝皇孫往治矣の「治」は國訓して「しらす」といふ。國家の統治を「しらす」きこすといふは統治を比喩的に述べたものであつて、共に受け納れ身につくといふ意である。即ち

天皇は「あかき心」を以て萬民に臨み、まつろはぬ者共をもやがて受入れて同化し盡さんとし給ふのである。これ即ち國史を貫く皇道の大精神であつて、列聖の御統治も一にこの精神にもとづき給ふのである。故に國民も亦「あかき心」を以て仕へ奉り、以て上下偕和君民一體の美しき國體を發展して來たのである。

神代より受けし寶を守にて

治め來にけり日の本つ國

といふ明治天皇の御製も、列聖の此の御統治の御精神を詠ませ給うたものと拜察せられる。

「寶祚の隆天壤とともに窮なかるべし」と。これ人爲を以

てよく言ひ得る所ではない。これ神勅である。人爲にあらず、天功である。これ即ち我が國民の絶對的信仰であつて、國家永遠に安泰なるべき根源である。吉田松陰は「國體」と云ふは神州は神州の體あり、異國は異國の體あり。異國の書を讀めば兎角異國の事のみを善と思ひ、我が國をば却つて賤みて異國を羨むやうに成行くこと學者の通患なり」と道破してゐる。我等は深く思を此所に致さねばならぬ。

天地の神やかためし萬世に

立ててうごかぬ國のみはしら

村田 春海

## 一四 忠君愛國

愛國心

凡そ自己の屬する國土と民族とを愛するのは人類一般の情である。蓋し人はその種族に生れ出てその國土に於て長じ、その言語習慣によつて教育せられ、國法によつて保護せられる。人が自國を愛するのは人情の自然である。故に各國民皆自國に對する愛國心を有する。近く歐洲大戰に於て交戦各國民が祖國の爲に勇戦力闘し、愛國の至誠を捧げたことは我等の知れる所である。

我が國に於ては此の愛國心と忠君の念とは全く一であつて二でない。これ我等の愛國心が他に比して大いに趣

我國の愛國

一四 忠君愛國

を異にする所以である。その原因を尋ねるに、我が國土はもと神聖の開かせ給うた所であつて、君と國と別れず、國初以來我が國民は皇室の恩惠德澤に依つて生存して來たのである。皇室は國民の宗家であつて、我等は實に天皇の赤子である。「義は則ち君臣、情は父子」とは古より今に至るまで皇室の民に臨ませ給ふ愛撫教養の實を宣はせられたものである。君と國とは一體である故に忠君と愛國とは一であつて二でない。歴史的にも精神的にも國をあげて一家である。故に忠と孝とは一致するのであつて、これ實に宇内に比なきわが國家の特色である。

忠君愛國の精神は君國に大事ある毎に特に著しく發現

忠君愛國の情  
の發現

して來た。和氣公や楠公一門の忠誠、元寇の難に際せる君民共同の護國心、日清・日露の二大戦役に於ける舉國一致の奮闘の如きは皆この國民的精神の發露である。

子らはみないくさの庭に出ではてゝ

おきなや一人山田もるらん

との明治天皇の御製は、日露戦役の當時國を擧げての國民の盡忠報國の状態をみそなはして詠ませ給うたものである。

凡そ國歩の艱難は國家に重大事變の生じた時にのみ止まるのではない。平和の時に於ても亦大いに戒心せねばならぬことがある。

波風のしづかなる日も船人は  
かぢに心を許さざらん

風俗を匡勵して浮華放縱を斥け、輕佻詭激の風を矯めて質實剛健醇厚中正の俗に歸すべきは、今日の如く各國競争の激烈な際、又國內に患ふべき事の多き際、國民の一致して力むべき所である。我等は油斷せず各自務むべき所に勉強努力して、君國のために盡さねばならぬ。

世上或は忠君愛國を以て人道博愛の義と相容れないものゝやうに思ふものがあるけれども、これは大なる謬見である。眞に自國を愛する者はまた他國人がその國を愛する心に共鳴して愛國の誠に於て肝膽相照すから、相敬愛し

忠君愛國と人  
道

て交際する。而して人道博愛は要するに萬國の人が互に相敬愛することであるから、忠君愛國は益、人道博愛の精神を進めるものといふことが出来る。眞の忠君愛國の精神は自國の私をのみ計つて他國を害しようとするが如き心とは正に天壤の差があるのである。

學問をなすもの先づ第一に國に忠ならんことを思ふべし。(中林成昌)

忠孝は天下の大本なり。(范文正)

### 一五 社會と個人

個人と社會

人は社會の中に於てのみ生存することが出来る。社會を離れては一日も生存することの出来ないことは、我等が身の廻りの一切のものは一も社會の恩恵に依らないものはないことを觀ても容易に知ることが出来るが、本來社會を離れた絶対の個人なるものは存在するものではない。人は必ず家族に屬し、家族は又必ず何等かの社會に屬し、廣く民族と其の國家に屬する。故に個人は必ず家族の一員としての個人であつて、また社會の一員としての個人である。縦には父祖及び子孫に連り、横には廣く社會に連る。

従つて精神的にも亦個人は決して社會の影響を脱し得るものではない。社會といふ中にも、民族的社會は最も個人と個人との關係が密接であつて、個人は必ず特有の歴史を有する民族の風俗習慣の中に養はれ、その民族に共通な言語によつて教へられる。故に前人未發の發明發見と見えるものの中にも、必ず前人の影響刺戟を認めると共に、最も獨創的と思はれる思想家、藝術家の著書作品の中にも、必ずその屬する民族に共通な特色を帯びることを否定することは出来ぬ。

かく個人は精神的にも物質的にも、社會を離れては生存することが出来ないと共に、社會も亦個人を離れては之を

社會と個人

考へることは出来ない。蓋し社會は個人が共同生活を營む所の統一體であるから、社會と個人との關係はなほ身體各部の全身に對すると同様である。一指を傷つけても全身が痛を感じる。個人は社會の影響統制を脱することが出来ないと共に、個人の行動も亦必ずその影響を社會全體に及ぼすところがある。一人が秩序を紊せば全體の秩序はそれだけ弛むのである。故に個人は常に自己の行動の社會全體に及ぼす影響を考慮して自ら律する所がなければならぬ。

社會の安寧と  
個人生活

社會全體の目的、即ち全體の安寧福利の爲に各人が個々の要求を節制し、氣儘な行動を戒める所に社會の秩序が維

持せられる。而して社會の安寧秩序が維持せられることによつて各人は安樂に業を營み、生存の目的を達することが出来る。されば各自が社會的徳義を重んじて全體の爲に自己の行動を節制することは、又實に自己の福利を全うする所以である。

社會の目的と  
個人

社會の目的は共同生活によつて各自の生存を確保し、共同の福利を増進するにある。故に社會全體の目的と個人独自の目的とは一應の區別はあるけれども、畢竟一致すべきものであつて、如何なる個人的目的も社會的生活を離れては達せられるものではない。個人の利害と社會全體の利害とは密接不離であつて、全體の利益を計れば自然己を



も利すると同様に、全體の利益を破壊すれば結局己の利益も亦損傷せられるのである。故に我等は決して己一身の利害にのみ執着することなく、常に全體の利益を増進することによつて自己の利益をも確保するやうに心掛けねばならぬ。たゞ人は單に己の利害によつてのみ行動すべきものではないから、萬一自己の利害と全體の利害が一致せぬやうな場合にあふ時は、固より私を捨て公に就くべきは言を待たないことである。

要するに社會の安寧秩序を維持し、共同の福利を増進して眞に共存共榮の實をあげんが爲には、社會の各自が全體と個人との相互依存の理を明かに自覺して、自己の行動を

個人の社會に對する義務

節制謹慎するばかりでなく、進んで全體の福利の爲に努力奉仕する所がなければならぬ。これ個人の社會に對する當然の責務であつて、また實に社會の恩惠に報いる所以である。

## 一六 男女關係

夫婦關係

社會組織の單位をなすものは男女の結合せる夫婦である。夫婦の結合によつて家族を生じ、親子、兄弟、姉妹の人倫關係を生ずる。而して家族は自然に集つて社會をなし、共同生活を營む。實に夫婦の關係は人倫關係の始めをなすもので、人類の生命を永遠に生々存續せしめる根柢となる

一六 男女關係

ものである。故に孟子は「男女居室、人之大倫也」といつて夫婦の結合の重大な意義を教へてゐる。

男女の性の別は種族の維持存続の目的の爲のものであるが、男女はその性の別によつて身心各、その特徴を異にする所があり、従つて自然にその職能を異にする。男子は體格強剛であつて膂力勝れ、精神著しく活動的攻勢的であるが、女子は體質柔軟であつて體力比較的弱く、精神亦溫和であつて守勢的である。従つて男子は勇氣を要し體力を要することに適し、女子は綿密細心な注意と繼續せる忍耐とを要することに適する。男子は組織計畫の方に長じ、進取敢爲の氣象に富み、女子は整理養護の方に長じ、同情親和の

情に富む。故に古來男子は或は出でて漁獵に従ひ、或は外敵を禦ぎ、或は工業に従事し、或は販路を開拓し、或は諸種の事業を計畫し、政治的活動をなす等、主として外に向つて活動したのに對し、女子は出産、育兒、家政等主として内を守ることに従つて來た。これその性の別に起因する性情の相違が自然に家庭生活に於てかゝる分業を生ずるに至らしめたものである。

然るに近來文化の進歩と經濟組織の變革によつて著しく女性の自覺を促し、女子も亦家庭を出でて社會の諸種の職業に従事するやうになり、特に歐洲大戰後は婦人の職業の範圍を擴張して大いにその社會的地位を向上せしめる

に至つた。従つて社會生活の一切の權益を男女同等とすべきことを主張する運動も盛んになつて來たが、男女は異なる性能の特徴によつて互に相依り相補ふにより家庭生活を圓滿にし、人類の生活に調和と幸福とを齎すことを得るものであつて、性の別に起因する男女の職分の相違は決して無視してはならぬ。故に男女各、その分を守り、その別を正し、十分にその特色を發揮しつゝ、協力一致する所に人類の眞理想が存するのである。

女子蔑視の風の誤

従つてまた女子を本來男子より劣れるものと考へ、その人格を蔑視する如きは偏見といはねばならぬ。男女の性の別は種族保存の目的の上に立脚せるものであつて、決して

て男女の優劣尊卑の差を示すものではない。故にその別を正しうして互に敬愛尊重し、相共に砥礪して相互の向上を圖るべきものであつて、決して他を蔑視し劣等視すべきものではない。

男女の別を明かにすべし

男女が結合して夫婦となるのは決して一身の幸福の爲のみではない。家族的生命を存續し、延いては民族國家の運命にも與らんが爲のものであつて、これ即ち夫婦が人の大倫なる所以である。古語に「國の本は家にあり」といひ、また「家齊ひて國治る」ともいつてゐる。國家社會の道德を維持し、風紀を向上せしめる根柢は純潔健全な家族生活にある。而して家族の始めは夫婦であるから、男女の關係を正

しうすることは最も重要な意義を有するものと知るべきである。

### 一七 社會事業

社會事業

社會には常に其の健全なる發達の障害となるべき缺陷がある。貧民あり、病者あり、孤兒もあれば、精神的不具者もある。これ等の哀れな人に對しては之を救濟し感化せんとする事業が昔から行はれてゐる。我が國の古代に於ける施藥院、悲田院の如きもこの精神から出たものである。たゞ往時に於てはこれ等の事業は主として個人の慈惠的行爲に任せてゐたが、近時社會意識の進歩に伴うて之を社

會の責任と考へ、社會自體の力でこれ等の救濟事業を行ひ、社會の缺陷を除去することに力めると共に、更に進んで諸種の合理的方案を立て、社會生活の福利を増進しようといふのである。凡そ社會がなすかゝる事業を社會事業といふのである。

保護救濟事業

社會事業を消極的に保護救濟を主とする方面から見れば、第一に窮民及び行旅病人、癱疾、老衰者、幼弱者、疾病者等に對する救濟事業がある。而して此等の事業は地方團體又は國家の手に依つて行はれてゐる。我が國には家族制度の風が存在し、親近相互に扶助する醇厚の俗が行はれてゐるから、公共團體の救助を受くるものが比較的少ないのは

國風の美點ともいふべきである。其の他軍人遺族に對する救濟事業もあり、風水火災の罹災者に對する救助もある。更に施療、傳染性疾患の療養、實費診療等を行ひ、又は養老、養育院等を設けてそれら、効果を收めつゝある。

貧苦に陥るものを防ぎ、經濟生活を安易にし、進んで社會生活の福利を増進しようとする積極的社會事業としては、第一に各都市にそれら、職業紹介所があつて、失業者に對する職業の紹介をなす外、或は簡易宿泊所を設けて安價に宿泊せしめ、或は授産所によつて職業的技能を養はうとしてゐる。消費生活を安易ならしめる爲の設備としては公設市場がある。需給の經路を簡單にして物價の平衡を圖

積極的社會事業

り、公平安價に物資を供給せんとするものである。更に公共團體の手によつて住宅を經營して之を供給し、或は低利資金を融通して中流人士に住宅を建築する便を與へる等、諸種の社會事業が行はれてゐる。

以上は經濟を主とした事業であるが、此の外不良の少年青年を感化扶掖して善良な社會人たらしめようとする感化事業、免囚者を保護し正業に就かしめようとする免囚保護事業がある。進んでは社會に健全な娛樂を與へ、修養の機會を與へ、不良の習俗を除き、良風美俗を作らうとする隣保事業がある。禁酒、禁煙等の運動を行つて惡風の矯正に力める矯風事業がある。孰れも社會の缺陷を補正して社

精神的社會事業

社會事業の精神

會生活を改善し、その福祉を増進する事を目的とする。

由來社會事業はその起原を宗教的動機に發したものであるが、近世に於ては社會が其の健全なる發達と向上の爲に社會自體の事業として之を爲すに至つた事は前述の通りである。これ社會と個人との關係が愈、有機的となつて、個人の不幸災害も社會全體の共同責任と考へられるやうになつた爲であつて、社會の道德意識の發達を示すものである。而して人口の増加と社會生活の複雑化とに伴うて社會の諸種の疾患も愈、深刻となつて來るから、今後の社會は益、これ等の事業を發達せしめる事が必要である。故に社會の各人はよく此等の事業の本質を理解してその健全

な發達に向つて協力する所がなければならぬ。これ現代文化社會に生活するものに課せられた義務である。

### 一八 國際關係

國際關係

交通の發達、貿易の進歩に伴うて國と國との交際は日々密接となつて、その關係も亦複雑を加へつゝある。故に我等は國際關係に於ても深く注意する所がなければならぬ。國際關係に於ても互に公正を重んじ、仁愛の精神を以て交るべき事は個人相互の場合に於けると同じである。各の國家は獨立して特殊の國體と文化を有すると共に、各自その權益を有する。故に自國の國體を重んじ完全にその

國際間の道德  
と國際聯盟

權益を擁護して他をしてその獨立性を犯さしめないと同様、我も亦他の國體を重んじて決してその權益を侵害しないやうにすべきである。然し諸國は隨所に相接してゐるから、所在に權益の衝突から來る問題が起る。そこで各國は互に國を代表する使臣を交換して、交際の親密と圓滿とを圖つてゐる。けれども尙紛争を生じ戰端を開くに至ることは、古來其の例に乏しくないが、戰爭はもとより人類の大いなる不幸であつて、特に戰敗國の被る慘害は甚だしいものがある。國際赤十字條約は其の慘禍を少からしめ、博愛の精神を以て敵味方の區別なく、負傷者を救護しようとした所から各國間で取決めた規約であるが、更にむしろ初

から戰爭の起らぬやうにする事が一層望ましい事であるので、こゝに國際聯盟が成立するに至つた。國際聯盟の目的とする所は、各國間の關係を公明正大にして、將來の戰爭を防止し、以て各國間の平和安寧を全うし、更に人類の幸福を増進するために、物質上からも精神上からも各國間の協力を促進することである。蓋し通信・交通・貿易の發達に伴ひ、諸國間に密接な經濟的關係を生じ、相互の精神的了解も亦増加して來たのと、歐洲大戰の慘禍が餘りに甚だしかつたので、再びかゝることを繰返さない爲にこの聯盟を成立せしめるに至つたのである。

國際聯盟は以上の精神を實行するために、國際間の紛争

は仲裁々判所、常設國際司法裁判所又は聯盟理事會に於て審査し、仲裁々判、常設國際司法裁判の判決又は聯盟理事會の報告があつた後、三ヶ月を経過するまでは如何なる場合にも戰爭に訴へない規定が設けられてゐる。國際聯盟の斯る精神を貫徹し、國際間のあらゆる戰爭を防止して世界の平和を永續せしめると否とは、一に各國民が國際正義を尊重し、互に他の權益を犯さないやうにするか否かに存する。然し社會に暴悪者の絶えないやうに、國際間に於ても不合理に他國の權益を犯し、或は暴力を以て他國の獨立を脅かし、侵略的行動に出る者が絶無とはいへぬ。自國の重大な權益が蹂躪せられ、或は獨立の面目を傷つけられるや

## 國際道德

うな場合は斷乎として我が正義を天下に主張せなければならぬ。故に平和協調の精神を重んずると共に、一朝有事のことも忘れてはならない。

けれども戰爭は最後の手段である。平常の交際に於て公正を旨とし、互の紛争も力めて平和的手段を以て解決するやうに心掛ければならぬ。自國の名譽自國の權益を尊重する心を推して、他國の權益に好意を寄せ、他國の名譽を尊重するやうにすれば、如何なる紛争も平和のうちに解決することは決して至難のことではない。國際間に於ても個人の場合と同様、互に敬愛同情の心を以て交ることが最も必要である。國際的正義の確立する所以もこの外に道はないのである。



## 一九 青年期

青年期

人の一生は心身の發達によつて種々の期間に區劃することが出来る。嬰兒期・幼兒期・兒童期・少年期・青年期・壯年期・初老期・老年期と別つのは最も普通の見方である。青年期は人によつては十二三才の頃から始まるとするものもあるが、純生理的に見る時は、七才の頃から十二才の頃までは身體的に兩性の差異を來しつゝある時期であつて、むしろ兩性兒童期ともいふべく、十六才の頃に至つて初めて性的に成熟した青年期に入るものと考へられる。故に眞に青年であると己も許し人も許し得るのは此の時期からであ

青年期の身體

る。青年は宜しくこの時代に於ける生理的及び心理的特徴を知つて、自ら修養上の規箴を決定せなければならぬ。青年期に入ると、身體が急激に發達し、身長・體重共に増進し、筋力も亦著しく増大する。故に此の時期は身體鍛鍊の最好期である。「鐵は熱したる時に於て之を鍛へよ」といふ語がある。此の期に於て困苦に堪へ、缺乏を忍び、寒風に抵抗し、炎暑を克服して身體を鍛鍊するは、やがて一生を通じて繁劇な活動に堪へる根柢を作る所以である。我等は勞働に、運動に、競技にあらゆる機會を逸せず身體を鍛鍊することに努力せねばならぬ。けれども軀幹の急激な發達は筋肉及び内臟機關の發達と伴はない事があつて、多くの機

質的疾患に犯される危機も此の期に存する。故に一方に身體の鍛錬を勵むと共に、一方には衛生に注意し、身體の清潔を保ち、不潔不衛生の場所への出入を戒め、暴飲暴食を慎んで病魔に犯されぬやうに心掛けねばならぬ。

青年期の精神

此の期に入ると、抽象的に思考する力も漸く發達し、自然界に對する認識も正しく合理的となると共に、他人の言行を批判的に觀る傾向を生じ、同時に著しく社會現象に興味を感じざるやうになる。而して個性も漸く明かになり、獨特の才能も判然と現はれて來る。天才偉人の如きは早くもこの期に大なる業績を成し遂げるものさへある。されど社會生活に關する觀念は未だ經驗に乏しく幼稚である。

人事の關係は複雑であつて、單純な一箇の理論法則を以て律し難いことを覺らず、強ひてあらゆる事象を一律に判定しようとし、その觀察批評は多く一邊に偏した不公平のものとなり勝ちである。その結果輕々しく他を責め、或は不平を起して先輩長者の言にも耳を傾けず、往々にして反抗的態度をさへとるものがある。最も戒慎すべきことである。青年は身心共に未熟である。その大成は將來に在るのであるから、世故に長けた長者の忠告を謹んで傾聽し、其の意に叶はないことでも讓つて之を聽く雅量が必要である。「忠言耳に忤へども行に利あり」といふ格言は青年期に於て特に適切である。

體力・知力の増進に伴ひ、青年の意志は少年時代に比べて著しく理性的となり、有意的に他を模倣する傾向が強い。偉人崇拜・天才崇拜等の傾向の顯はれるのもこの時期である。而して自ら一箇の理想を掲げ、一定の計畫を立て、之が遂行に熱心する。しかも一面また甚だしく感情的・衝動的となり、奇矯奇激の言動をなして自ら喜ぶ風がある。かく體力と、知力と、意志と、感情とが完全に調和してゐないから、ともすれば或時期は勉學に熱中し、或時は極度に弛緩するやうな所謂衝動の交代の現象を呈する事がある。希望は大であるが、實力が之に伴はないから、或は樂觀的となり、或は極度に悲觀的となつて、理由もないのに徒らに煩悶す

るやうな事もある。同情と殘忍、高尚な道德的理想への希求と低級な欲望の満足と、相反對せる状態が交、發現して、所謂精神的醜酌の状態に至ることもある。宜しく鞏固なる意志を以て感性衝動に克ち、着實に勉強努力を繼續して生活の根柢をこゝに確立せなければならぬ。

古の武人は此の時期に於て初陣の功名を争つた。後三年の役、金澤柵の攻略に従ひ、弓手の眼を甲の鉢付の板に射付けられながら、當の敵を射落した鎌倉權五郎は十六歳であつた。華やかな賤岳の七本槍も、若武者達の活動であつた。グローチウス、コントの如き此の時期に於て偉大なる思想家の列に入り、ベートベンは名曲の多くを世に遺した。

最も多望なるも青年期であり、最も危機を藏することの多いのも青年期である。我等青年期に在る者は、須らく反省自重して悔を後日に残す如き輕舉妄動を戒め、人一たびすれば己は十たびし、人十たびすれば己は百たびする意氣を以て日夜身體を鍛へ知徳を磨き、以て將來の大成に備へる所がなければならぬ。

## 二〇 中江藤樹の教學

中江藤樹

藤井懶齋は其の本朝孝子傳に藤樹先生を賛して、淡海吹起、陸王儒風、豈翅善身、誨人有忠、爲母顛祿、旋鄉色愉、于嗟篤孝、性乎學乎といつてゐる。藤樹は篤孝至純の資を以て良知

の學を唱へ、門生に教へ里人に諭すに孝道の實踐躬行を以てし、又自ら母に事へて終身その愛敬の意を盡し、眞に知行合一、學徳一致の篤行家である。世に近江聖人と稱し徳風今に及んでゐる。

藤樹の略傳

藤樹名は原、字は惟命、通稱與右衛門、藤樹は其の號である。江州小川村に生れたが、幼にして祖父に養育せられ、從ひて伊豫國大洲にゐた。十一才の時始めて大學を讀み、自天子以至庶人、壹是皆以修身爲本の一句に至り、痛く感奮して道を修むることを己が任とした。十二才の時食事する際箸を措いて、此れは是れ誰の賜なる。一には則ち父母、二には則ち祖父、三には則ち君なり。三者の恩須臾も忘るべから

ず」と歎じた。祖父の没後なほ大洲に止つて藩侯に仕へてゐたが、母を思ふの念止まず、迎へて孝養を盡さうとしたが、母は老いて異郷に赴くことを欲しなかつた。そこで屢致仕を請うたけれども許されず、遂に祿を捨て、郷里小川村に歸り、酒の小賣を營んで生活の資とし、専心母に仕へて孝養を盡した。而も講學の心は寸時も止まず、益力を學業に致すと共に來る者に道を教へ、後に藤樹下に書院を建て、子弟を教へた。

其の人物

初め専ら朱子學を尊信して嚴に禮法を以て自ら持したが、後その非を悟り、本心良知の體を體認して之に循ふべきことを唱へ、王學を奉ずるに至つた。此に於てその拘泥を

脱し圭角を去つて風貌更に溫乎となり、氣宇濶達、その徳愈光を發した。門人之を形容して「性濶達にして大度あり、其の心極めて洒落、而も人其の洒落たるを知り難し。極めて愛敬あり、而も人其の愛敬たるを知り難し。卑遜にして陋劣ならず、撲實にして固滯せず、其の氣宇の定靜なる、倉卒の間に遭ふと雖も遽色なし。人に接するや溫恭謙退、村民と農事を語るに恂々然として和氣面に溢る」といつてゐる。以てその風格を想見することが出來よう。

四十一才の短き生涯に於て藤樹の日夜力めたことは孝道の實踐であつて、其の教學の中心も亦孝徳の究明にあつた。藤樹は孝徳を人倫道德の根本と考へ、而して其の實は

孝

畢竟愛敬の二字に外ならずと考へてゐた。愛はねんごろに親しむ意であつて、敬は上をうやまひ、下をかるしめ侮らざる義である。一切の人倫道德は此の愛敬の心の感通によつて行はれる。たとへば明鏡の如きものである。向ふ者の形と色とによつて鏡のうちの影はいろくゞに變るけれども、悉く明かに之をうつし表はすやうに、君臣・夫婦・兄弟・朋友の人倫の關係も皆この愛敬の心の感通によつてそれぞれその道が立つのである。父母を愛敬すれば孝となり、二心なく君を愛敬すれば忠となる。その外何處如何なる人と交つても愛敬の心の感通せぬ所はない。故に一切の道德は悉く孝に歸するのであるが、親を愛敬するのが感通

の根本であるから特にこれのみを孝と稱したのである。而して身を立て道を行ふを孝の要とする。身を立つとは我が身は元來父母の身をわけて受けたものであるから、我が身を父母の身と思ひ定めて苟且かつまにも不義無道を行はず、大切に愛敬することをいふのである。道を行ふとは父母を愛敬する心を本とし、推し擴めて人倫に交り萬事に應じて假初にも偽りを言はず、不義を働かずして視聽言動みな道に當るをいふのである。故に孝は人倫の大本たるのみならず、天地萬物の道の行はれる所以も亦實に茲に存するのである。而もこの教は藤樹が其の實行によつて發明した所のものであつて、今日と雖もなほ我等の心に迫りて切

なるものがある。我等は深くその深旨を反省領悟する所がなければならぬ。

藤樹教學の精神

更に藤樹は學問するものゝ心得を説いて「眞實の學問をなすに最も障害となるものは慢心と名利の欲なり。慢心を生ずる時は天下我を越すべき者なしと人も許さぬ高慢を鼻に下げ、人を蠅蟲とも思はず、父母を侮り、主君を誹り、朋友を嘲りてかりそめにも己を是とし人を非とす。故に溫恭自虚の四字を以て初學の心法とす。慢心を以て魔道に入れる者とすれば、名利の欲に驅らるゝ者は畜生道に入る者なり。愛敬の本を失ひ、孝悌忠信の人倫を傷つくることこの二者より甚しきはなし。學問する者の最も戒慎す

べき所なり。眞實の學問の工夫には先づ自慢の浮氣、名利の欲心を棄て、間念雜慮の妄を除き、明德の心源を澄し、全孝の心法を受用するを根本第一とすと教へてゐる。全孝の心法を受用すとは孝の外には徳もなく道もない事を明かに辨へて、孝を萬行萬事に通貫するを云ふのであつて、藤樹の此の教戒は我等の深く鑑戒とすべき所である。

古語に「言<sup>フコト</sup>之<sup>ノ</sup>非<sup>ハ</sup>難<sup>キ</sup>、行<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>惟<sup>ニ</sup>難<sup>シ</sup>」といつてゐる。その行ふ所かくの如く篤く、その説く所かくの如く深遠なる藤樹の如きは古今實に稀に見る所である。その近江聖人として崇められ、萬人の景仰を受ける所以は決して偶然ではない。

新制中學修身卷三(畢)

昭和六年十一月七日印刷  
 昭和六年十一月十日發行  
 昭和七年二月三日訂正再版印刷  
 昭和七年二月六日訂正再版發行



新	卷數	定	價
一	金三十六錢		
二	金三十七錢		
三	金四十三錢		
四	金四十六錢		
五	金五十三錢		

發兌

(振替口座東京二六四四番)  
 (振替口座大阪四七一番)

著者  
 廣島市鐵砲町六六  
 西 晉 一 郎

發行者兼印刷者  
 東京市神田區表神保町二  
 鈴 木 政 雄

發行者  
 大阪市東區博勞町五丁目  
 鈴 木 常 松

修文館  
 東京市神田區表神保町二  
 大阪市東區博勞町五丁目



第十學級

(19)

村上幸

